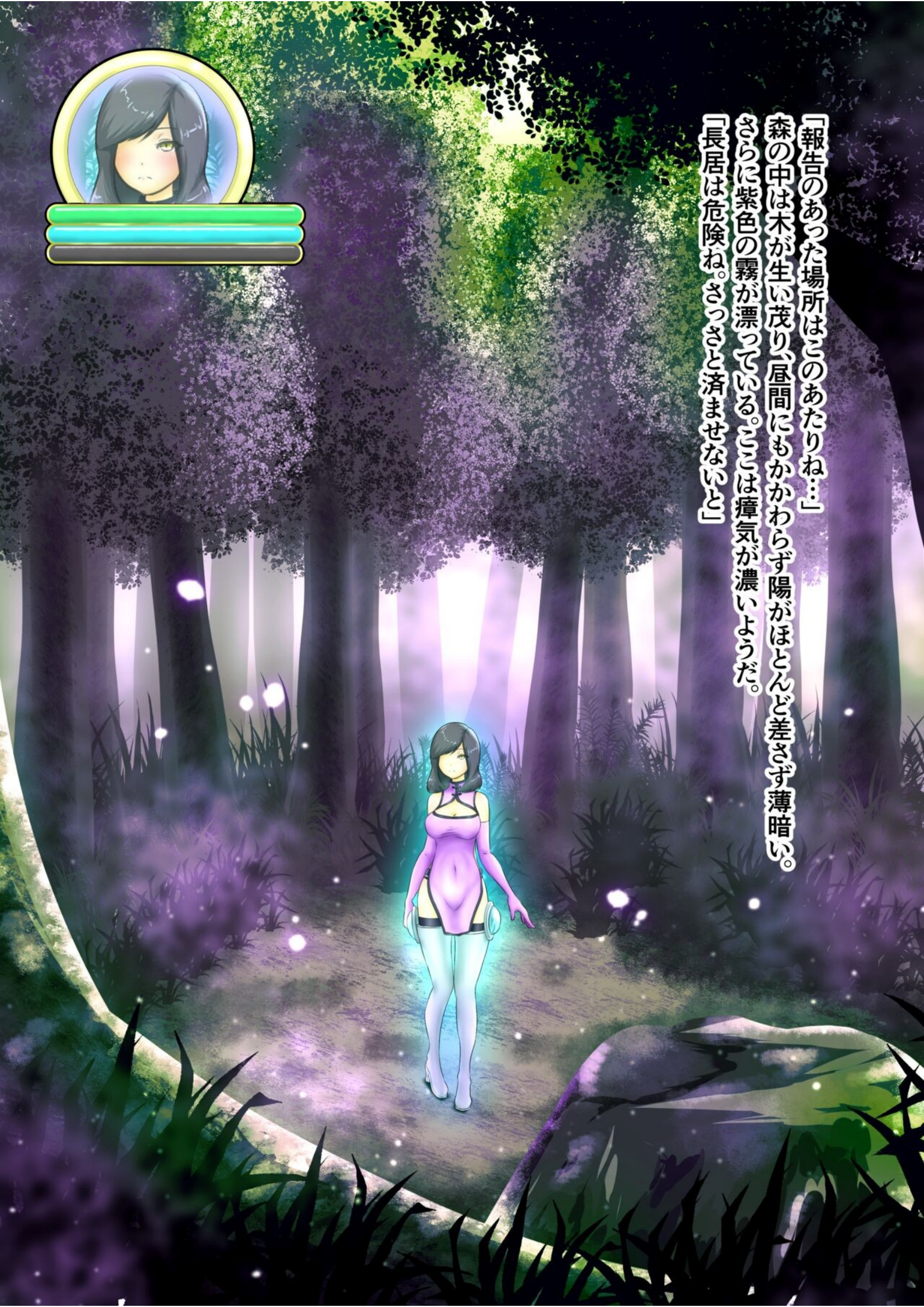
ウチの子がえっちな敵に色々される話

でゅう

Hな攻撃で人間から
エネルギーを吸収する「魔の者」
町外れにある森の中は瘴気が濃く、
放っておくと増殖・進化し
町に被害が出るため定期的に
駆除する必要がある。

今回、普段駆除にあたっている魔導兵が返り討ちにあう
という事件が発生。
新種もしくは強力な魔の者が出現している可能性があり、
調査・駆除のため、坂月十色は例の森へ向かった。


「報告のあった場所はこのあたりね…」
森の中は木が生い茂り、昼間にもかかわらず陽がほとんど差さず薄暗い。
さらに紫色の霧が漂っている。ここは瘴気が濃いようだ。
「長居は危険ね。さっさと済ませないと」

森には植物系統の魔の者が多い。
動き回ることができず、近くを通りかかった獲物を
捕まえるトラップのようなものがほとんどだ。
植物型の魔の者は
エネルギーを吸収しやすいように
「いかにも」な外見をしており、
色合いも通常の植物とは異質である。

つまりそれは、
周囲を注意深く観察し、遠くから
攻撃すれば容易に駆除できる
ということだ。

十色は手際よく、
一体一体確実に駆除していく…。

（数はそれなりだけど
新種や強力なやつは
いないみたい…これなら
早く済みそうね）

がささっ！
突然頭上から物音が聞こえた。
「！？」
十色が音の正体を確認するよりも早く、
それは十色の体を捕らえ、抱え上げた。
「なに…これっ！？魔の者…っ？」
経験したことのない急襲に面をくらうが、
十色はすぐに冷静に相手の分析を始める。

どんぐりのように茶色でつるりとしていて硬く、
人間の上半身のような形をしている。
見たことがない…新種のようだ。
？？？？
？？？？
腰辺りで極端にくびれ、ツタのようなものが
頭上に見える枝葉のさらに上へと伸びていた。
視認できない高さからの急降下。
初見でこれは躱せない。

とにかく脱出だ。

十色は魔の者の腹部を思い切り殴る！
しかし、皮膚が非常に硬く
宙づりで踏ん張りの効かない
状態では効果はイマイチ…。

REDUCE

????

「それなら…っ！」
魔法で吹き飛ばすまで。
半端な魔法では倒せそうもない。
十色は手のひらに魔力を集中させていく。

?

不意に柔らかくぬめりのあるものに股間をなぞられ、恥ずかしい声を上げてしまう。集中を切らし、手のひらに溜めた魔力が霧散してしまった。

見えなくても舌で舐められているのは明らかだ。魔の者が分泌する体液には強力な催淫作用がある。

「まず…いっ！早く抜け出さないと…！」

十色は急いで魔法の準備に入る。

「あぁっ♥ やぁっ♥」
ビクンッ♡
ビクンッ♡
ビクンッ♡
ビクンッ♡
レロレロ♡
レロッ
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
レロレロ♡
レロ♡
？？？？
？？？？
十色の焦りに反応するように
魔の者の責めも激しくなっていく。
（そんなにされたら…っ♥ 魔法に集中できない…♥）
身をよじって刺激から逃れようとするが、
下半身をガッチリと固定され動けない。

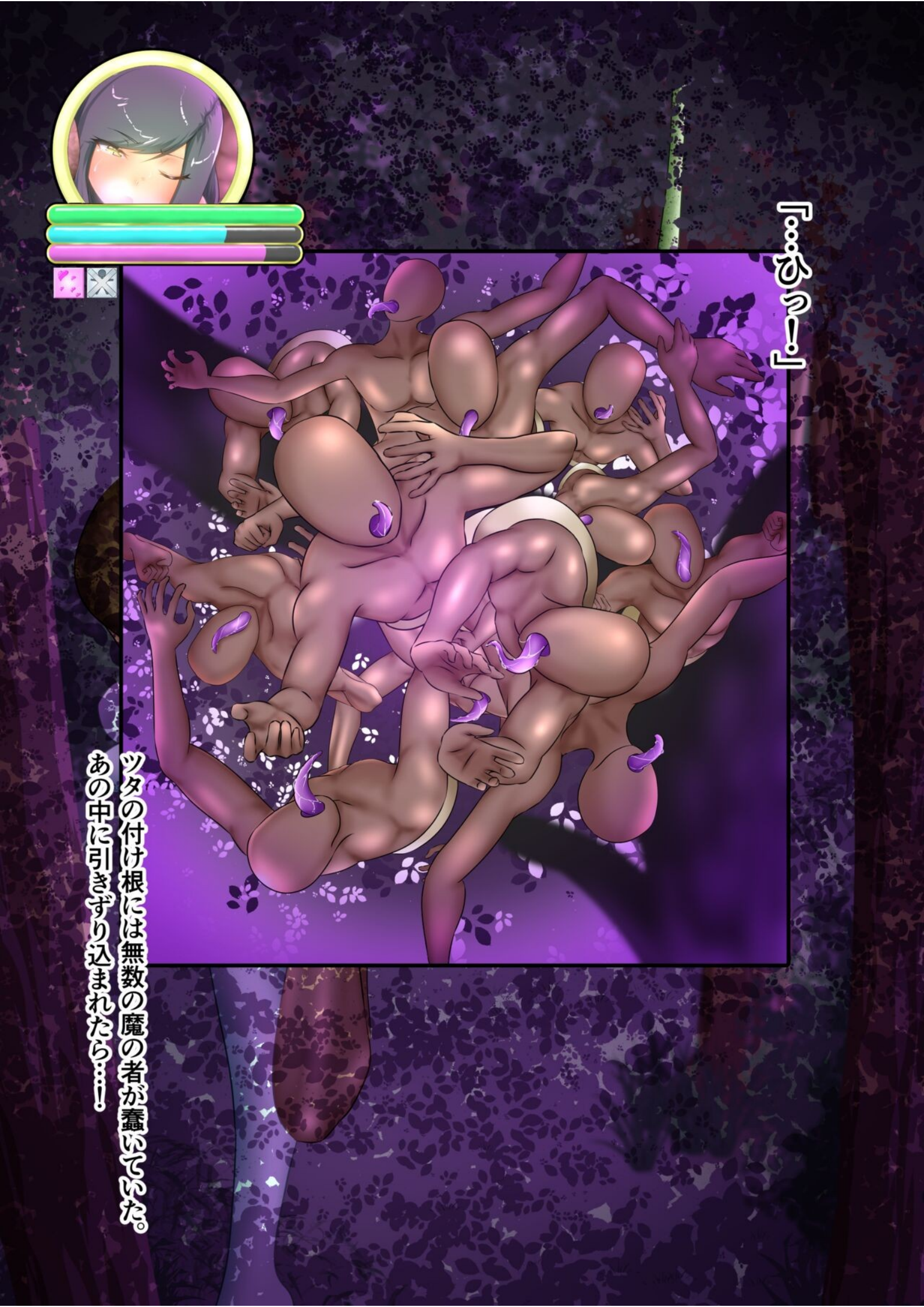
「…っ♥ そこっだめ…っ♥」
魔の者はさらに後ろの穴も舐め始めた。
下着越しに穴を優しくなぞったり、
強くほじったり、緩急をつけて責め立てる。

「～っ♥ …んん♥ く…ふ…う♥」
十色は身をこわばらせ快感に必死に耐える。
しかし、舌から分泌される淫毒により
感度を高められどんどん追い詰められていく。

十色の抵抗が弱まったところで、
魔の者は下着の中に舌を潜り込ませる。
「あぁっ♥ ひぃっ♥」
魔の者は膣と直腸を激しくかき回す。
十色は全く抵抗できていない。
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ
+感度上昇
+感度上昇
+感度上昇
+感度上昇
????
????
!!CRITICAL!!
!♥WEAK♥!
ぬちゃ
ぐちゃ
ずっちゃ
ニリ
ニリ
ニリ
ニリ
ぐりゅ
ぐりゅん

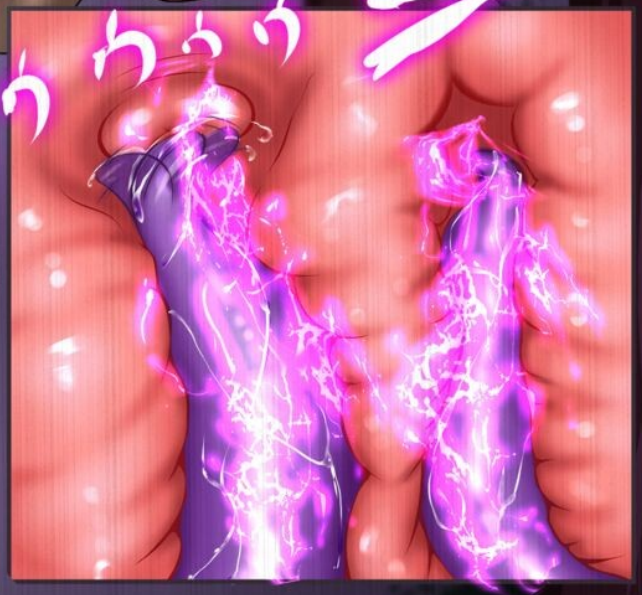
「～～～っ♥ あああああぁぁっ♥」
十色は絶頂してしまった。
魔の者は抵抗力を失った十色の体から
魔力を吸い取っていく。
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ
ヒクッ
????
????
キュウウウ..

「ふーっ…♥ ふぅ～っ♥」
十色は呼吸を整え、魔力の流出をとめる。
「…えっ？」
かさかさっと木の葉が顔にあたる。
？？？？
？？？？
責めに耐えることに必死でわからなかったが、
少しずつ上へと引き上げられているようだ。
（どこかに…連れていかれる…!?）
木の葉の波を抜けるとほかの木々より頭一つ背の高い木があり、
魔の者をつなぐツタはそこにつながっていた。


「…ひっ！」
ツタの付け根には無数の魔の者が蠢いていた。
あの中に引きずり込まれたら…！

「いやっ！やだっ！」
十色は必死に身をよじって
拘束を振りほどこうとした。
？？？？
？？？？
ビクッ♡
ビクッ♡
くちゅっ♡
くちゅっ♡
くちゅっ♡
くちゅっ♡
くちゅっ♡
グチュッ♡
グッチュ♡
グチュッ♡
グチュッ♡
グチュッ♡
「あっ♥…う～～っ♥」
しかし、魔の者の舌が再び蠢きだし
力が抜けてしまい失敗する。

「だめっ…や…め…あああああっ♥」
全く耐えることができず、
大きくのけぞり盛大に愛液をまき散らして
絶頂してしまった。

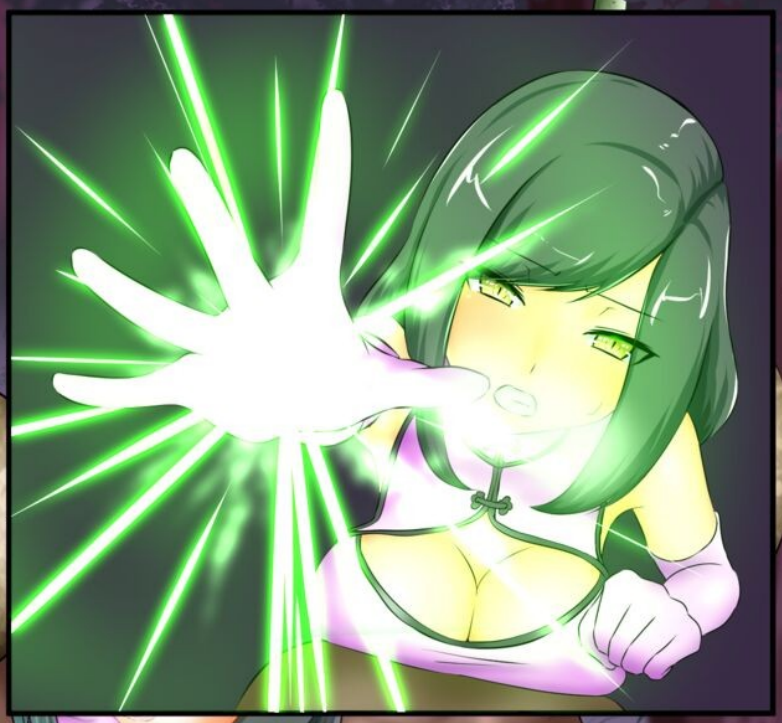


ヒクッヒクッ
キュウウウウウ〜♥
????
????

打撃は効かず、強力な魔法は妨害される。
（どうすれば……っ！）

魔の者の吊り下げるツタが目に入る。
（あそこなら…！）

十色は一か八か、ツタに向けて小さな光弾を放つ。



????

????

!!CRITICAL!!

威力の低い魔法だったが、あっけなくちぎれた。

ツタを切断された魔の者は
塵となって消滅した。
ツタ2本で吊るされた十色たちは
バランスを崩し大きく揺られる。
十色はその勢いで放り出された。

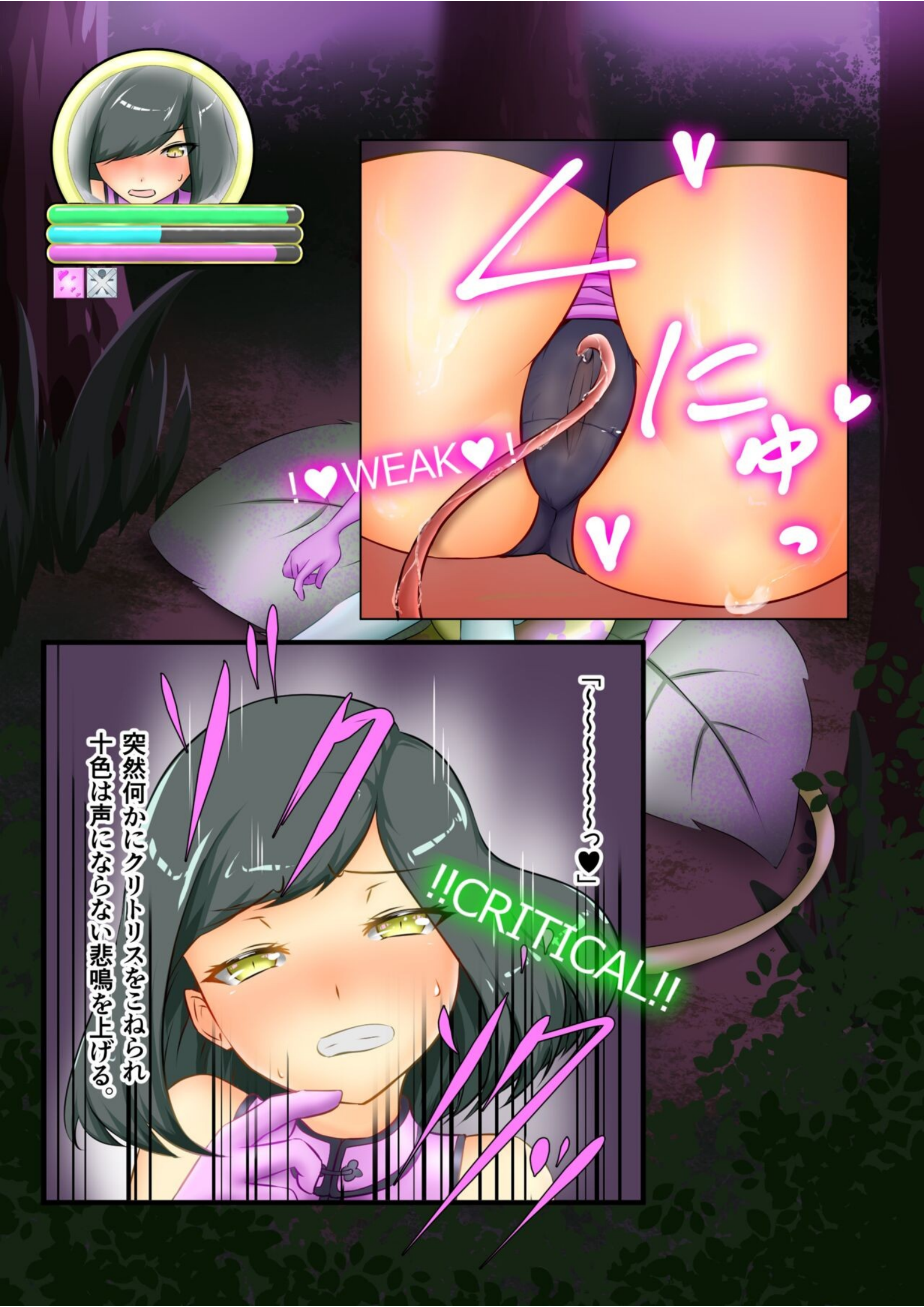
レポート① 「ハングドマン」

高い木の枝にぶら下がっており、獲物が近づく急降下して襲い掛かる。
硬い外皮に覆われ攻撃が通じにくいが
力を供給するツタを断つことで簡単に倒すことができる。
事前に察知しづらいので襲われたときに冷静に対処できるよう
対処法を周知しておくことが大切。

宙づりで不安定な体勢で思うように動けない中
一方的に責められて、とても悔しかったわ。
凄く気持ちよかったのがなおさら腹立つ。

（脱出できた…けど）
空中に放りだされ、このままでは地面に激突する。
十色は絶頂の余韻でぼんやりした頭と怠い体を何とか動かす。
受け身はとれそうにない。
防御魔法で身を包み、衝撃に備えた。
↑ ↑ DEFENSE ↑ ↑

ぶにゅんっ
想定していたものと違う感触に戸惑う。
それほどダメージはなくて助かったが…。
「…あれ？　お尻…ハマって…」
十色は見たことのない物体に尻だけハマりこみ
というマヌケな恰好をしていることに気付いた。
（…誰も見てなくてよかった…）
十色は尻を引き抜こうと手に力を込めた。


ムニュ
!♥WEAK♥!
「～～～～♥」
!!CRITICAL!!
突然何かにクリトリスをこねられ
十色は声にならない悲鳴を上げる。

くりくりくりくりっ…
「っー!? なっー!? ひぃあああああっ♥」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
くり
くり
くり
くり
くり
くり
わけもわからず絶頂させられてしまう。
それと同時に魔力を吸い取られる。
(…っ♥ これも魔の者なの…♥)

「…くっ…このっ…」
地面にほとんど埋もれているが
食虫植物のような形をしているようだ。
まさか新種の魔の者の上に
ピンポイントで落下するとは…。
自分の運の悪さを呪いつつ戦闘態勢に入る。
うぞ
うぞ
うぞ
うぞ
うぞ
うぞ
うぞ

しかし。
くりくりっ♥ くちゅくちゅ つぽっ…つぽっ…
「あぁっ♥ このっ…やぁあっ♥ んん～～♥」

くりくりくりく

魔の者は無数の触手でクリトリスをこね、
膣内をかき回し、尻穴をほじる。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
????
くり くり くり
ちゃく
ちゃく
ちゃく
ちゃく
!!CRITICAL!!
!!CRITICAL!!
!♥WEAK♥!
!♥WEAK♥!
!♥WEAK♥!
「あああああっ♥ …っ♥ あっ…♥
待っ…イッてる！ イッてるからぁっ♥」
十色はたまらず髪を振り乱し叫ぶ。
しかし魔の者はおかまいなしに責めたて魔力を啜る。

「あ…っ♥ かはっ♥ だれ…か……あぁぁっ♥」
脳が焼き切れそうなほどの強烈な快感に
思わず助けを求める。
ビクッ
ビクンッ
？？？？
触手の動きに合わせて
十色の体ががくんがくんと痙攣する。
当然助けが来ることはなく魔力を吸われ続けた。
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
WEAK
WEAK
WEAK
!!CRITICAL!!

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
????
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
クチュ
WEAK
WEAK
WEAK
WEAK
!!CRITICAL!!
!!CRITICAL!!
10分後…。
「…あ…っ♥ が…っ♥ ……っ♥」
絶え間ない愛撫による絶頂と魔力吸収により、
十色の体力と魔力は底をつきそうになっていた。
（もう…だめ…っ ……！）

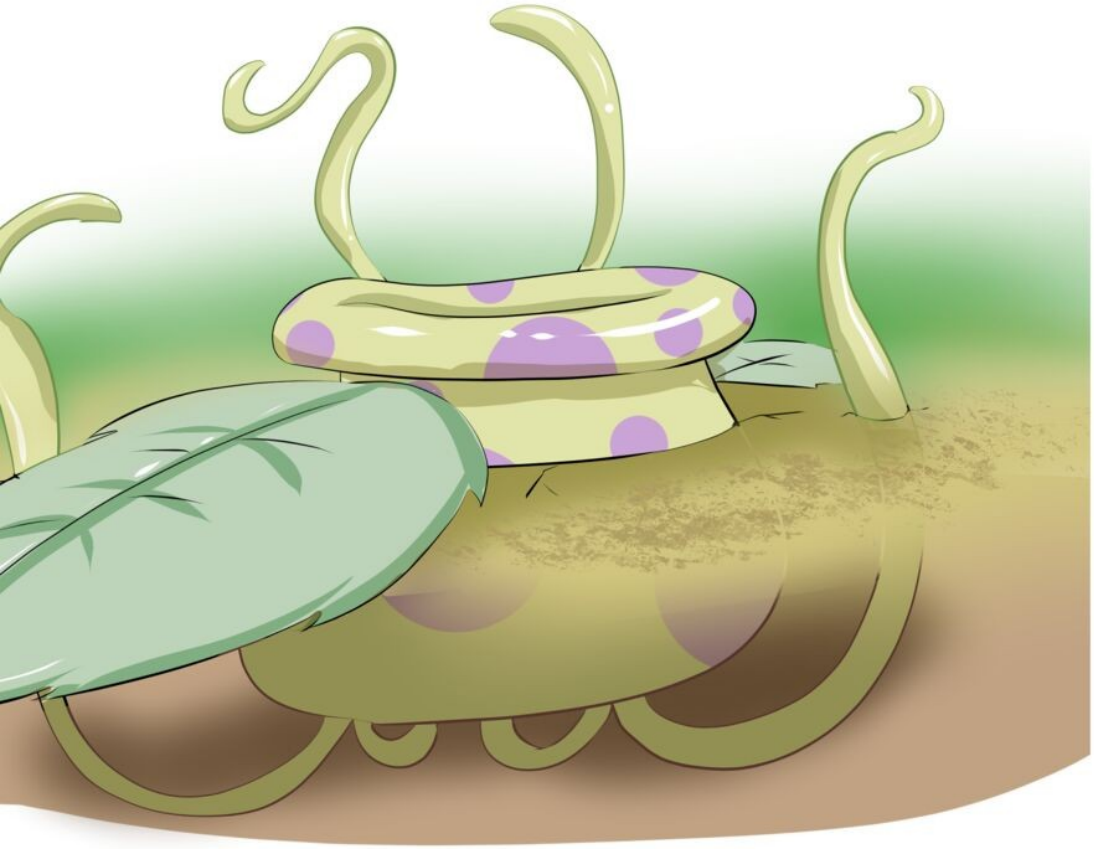
十色があきらめかけた時、
魔の者の愛撫が止み、ポンっと吐き出された。
十色は唐突な解放に戸惑う。
魔の者はゲップのような音をたて、
動かなくなる。心なしか満足げな様子。
「…魔力を搾り取ったら用なしってわけね…」
魔の者は人間の魔力・精気が目的で
血肉に興味はなく、敗北しても死ぬことはない。
十色は普通に遭遇すれば負けることのない
相手に食べかすを捨てるような扱いに怒る。
…っ？
しかし、仕返しどころか自力で立ち上がる
ことすらままならず、地面を這いながら
魔の者から逃げることしかできなかった。
「……今度、絶対やっつけてやるんだから…っ」
？？？？
げぷ～っ

すぱぁんっ！すぱぁん！
「いっ…！あぅっ！」
突然尻をひっぱたかれる。
魔の者がツタを鞭のようにしならせ攻撃してくる。
ぱぁん！
すぱぁん！
トドメとなるような威力はなく、
再度捕獲しようとする動きでもない。
まるで『さっさと失せろ』と言われているようだ。
「くぅ…この…っ」

すぱぁん！ すぱぁん！ すぱぁん！ すぱぁん！
「あっ♥ ひんっ！ わかった…！
どこかへ行く…あうっ♥ …からぁっ♥」
魔の者はのろのろと移動する十色の尻に
容赦なくムチ攻撃を浴びせる。
ヒック
ヒクッ
派手な音と衝撃の割に痛みは少ない、絶妙な力加減。
十色は不覚にも感じてしまい、甘い声を上げながら
無様に地面を這い、逃げた。

レポート② 「ラブポッド」

体の半分を地面に埋まっており茂みにいると気づきにくい。
獲物をツタでからめとり壺状の本体へ放り込み体内の触手で
魔力を吸収する。
衰弱した獲物を放置すると他の獲物が警戒するため
ある程度搾り取ったらツタで攻撃し追い払う。



人を丸ごと呑み込める大きさじゃないし
力も弱いからそれほど脅威ではないけど、
体内の温かさとぬるぬると無数の触手は
反則的な気持ちよさだからお尻からハマらない
ように気をつけて。

「……どうしよう」
なんとか歩き回ることができる程度に回復したが
戦闘できる魔力は残っていない。
愛液と粘液でびしょびしょになった下着を脱ぎ捨て
股間も心許ない。
「アレが近くにあればいいんだけど…」
魔の者と一度も遭遇せずに森を抜けることは不可能だ。
十色は森の中で魔力を回復する方法を一つだけ知っている。
十色はそれが近くにあることに望みをかけ、慎重に森の中を進んだ。

数十分後…
「!……この匂い……!」
森の中で嗅ぐには不自然な、
はちみつをたっぷり入れた
ホットミルクのような甘い匂いに
十色は安堵する。

ほどなくして独特な形の果実
をつけた木が見えてくる。
あの果実を摂取すると疲労と
魔力が回復、自然治癒力が向上し
軽傷ならたちまち治癒できる。

十色は以前、森の中でこの木をみかけ、
甘い香りに惹かれ口にしたことがあった。
瘴気に満ちた森にある果実を口にするなど
不用心だとは思うが、今はその経験のおかげで
現状に希望を持つことができている。
「この前食べた時は何もなかったし、大丈夫よね」

この果実は食べ方がある。
果実は幹から直接生えており、もぎ採ることができない。
中身が液状なので切り落とすとこぼれ出てしまい、
一度外気にふれるとたちまち蒸発してしまう。
そのため、この場でそのまま口をつけていただく。

果実の表面は分厚いゴムのように
固く弾力があり歯が立たないが、
先端のみとても薄く、先端を咥え
舌で舐めていると徐々にふやけて破れ、
中身が出てくる。

れろ

れろ..

れろ

とろ...

「……んっ」
最初に出てくるのはさらさらとした液体だ。
柑類に似たすっきりと甘い味で飲みやすい。

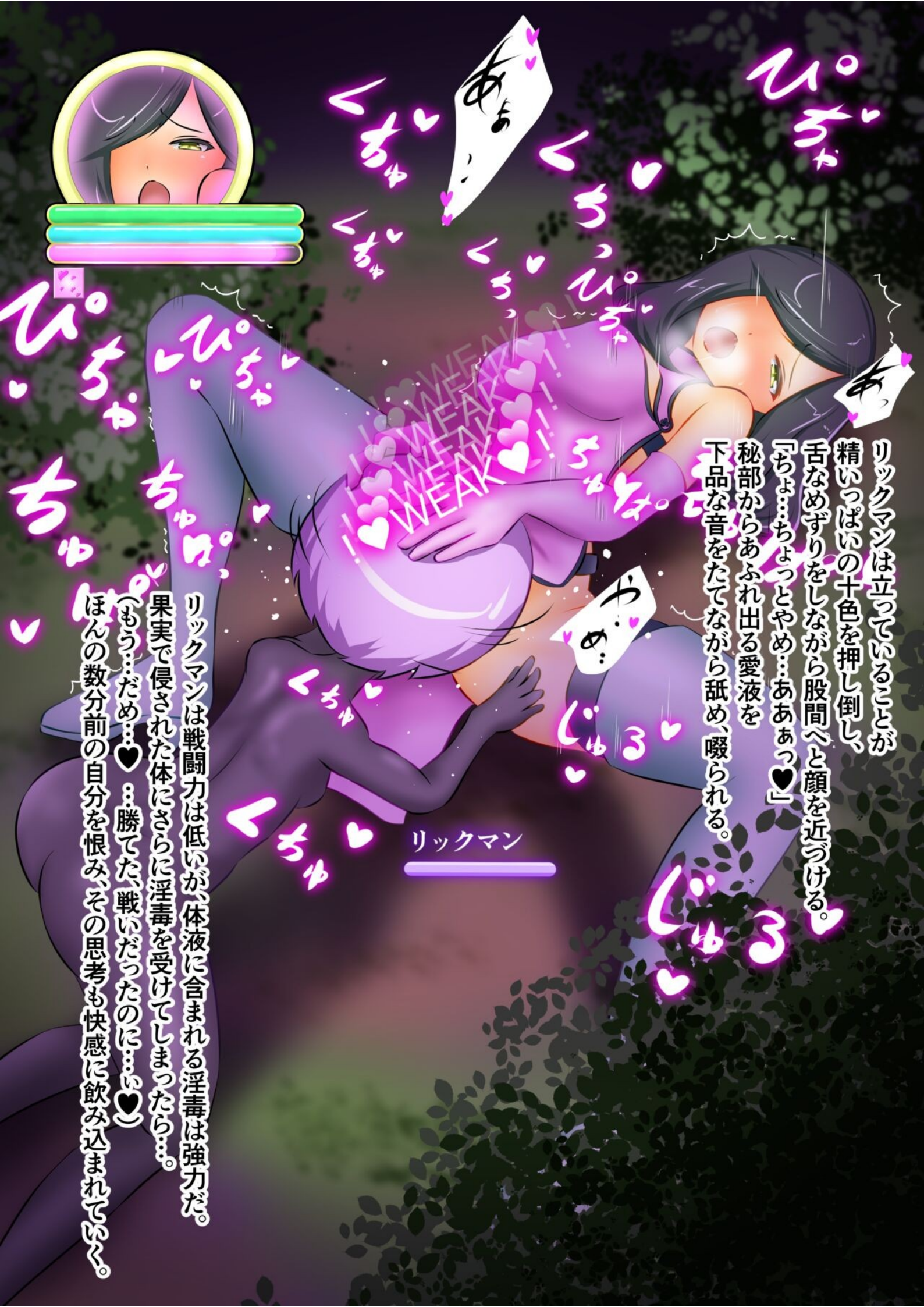
少し飲むと中身が出てこなくなる。
そうなったら次は果実の付け根から手前へ
しごき中身を絞り出すのだ。
ちゅ♡
ごくん
ごくん
ごくん
ごくん
ごくん
ぽた、
ぽたた、
すると今度はヨーグルトのようなドロリ
とした液体が出てくる。
練乳のように濃く甘いが少し遅れてくる
ほんのりとした苦味が癖になる。
口内に絡みついて飲みにくいため、
しごく力を加減し少しずつ飲んでいく。
「…んく…ごくん…んっ♡」

体力と魔力が徐々に満たされ、
冷静な思考ができるようになり、
自分の今の行為が急に恥ずかしくなる。
……，
かぁあ…
（初めてこの実を見た時、
なんですぐに食べ方が分かったんだろ…）
（この実…まるで男性の……私これを…っ）
「…回復するためにやむなくやってるんだから…！」
自分の思考をかき消すように、言い聞かせるようにつぶやき、
果実においしそうにしゃぶりついた。
じゅぶ…
じゅぶ…
じゅぶ…

「…ふぅ…これで戦える…！」
十色は果実を食べ、全快した。
むしろ森に入る前より調子がいいかもしれない。
がさっ
前方の茂みから暗紫色の肌に
桃色の髪をした子供が歩いてくる。
魔の者の中でも最弱の「リックマン」だ。
！
ガサッ。。
リックマン

「…もう少し早く来ていれば私に
勝てたかもしれないのに…残念ね」
リックマンに向けてゆっくりと手を突き出す。
光弾を放つ構えだ。
リックマン
普段の十色なら無言で淡々と
魔の者を倒していくのだが、
今の十色は魔の者たちにさんざん嬲られ
鬱憤がたまっているようだ。
圧倒的優位な状況に浸っており、少し饒舌だ。
「さぁ、消えなさ……っ!?」

ずくんっ
突然下腹部が激しく疼き、愛液が溢れ出す。
「あ…れ…？」
＋催淫
一瞬にして全身が火照り、体の力がどんどん抜けていく。
原因が先程の果実なのは明らかだ。
（この前は何ともなかったのに…どうして…？）



リックマンは立っていることが精いっぱいの十色を押し倒し、舌なめずりをしながら股間へと顔を近づける。
「ちょ…ちょっとやめ…ああぁっ♥」
秘部からあふれ出る愛液を下品な音をたてながら舐め、啜られる。

リックマンは戦闘力は低いが、体液に含まれる淫毒は強力だ。
果実で侵された体にさらに淫毒を受けてしまったら…。
（もう…だめ…♥　…勝てた、戦いだったのに…い♥）
ほんの数分前の自分を恨み、その思考も快感に飲み込まれていく。

ちゅるる～♡
リックマン
ヒクッヒクッ
「あん♥あっ…あっあっ♥　んぁあああああああっ♥」
小さな舌で舐められるたびに全身を痙攣させ、
大声で喘ぎちらしながら何度も絶頂させられた。

およそ10分後、
腹いっぱいに魔力をくらい満足したのか、
リックマンは去っていった。
ぐっ
ぐっ
ぐっ
自分の慢心を悔みながら呼吸を整える。
「……帰ろ」
幸い、魔力はまだ半分程度残っている。
十色はもう油断しないと心に誓った。

レポート③「ギバー」

性器のような実のなる木。
男性器だけでなく膣や乳房の形をした実がある。
中には栄養と魔力がたっぷり含まれた液体が入っており
体力・魔力が全回復する。
しかし超強力な媚毒入りの実が紛れており、
見分けがつかないため摂取しないほうが無難。

補給できない森の中で無条件で
全回復できるのはかなり魅力的。
リスクを承知でこの実を食べる人も
いるだろうから、これからも被害は増える
でしょうね。これが意図的だとしたら相当
狡猾な魔の者だわ…。

十色は周囲を警戒しながら森を歩く。
不意さえ突かれなければ、魔の者に後れを取ることはないのだ。
『…！』
前方に小さな光が見える。
ポゥ…
距離が遠く、それが何かはわからない。
十色は何が起きても対応できるよう神経を研ぎ澄まし、
光を注視しながら慎重に近づいていく。
『……』

「ん…っ♥ あぁ…ん♥ …え…？」
いつの間にか少しぼーっとしていたようだ。
股間を何かが優しく擦りあげている。
（…気持ちいい… …あ…れ？私…何して …っ！）

十色は今の自分の恰好を見て驚く。
棒状の何かに自ら股間をこすりつけていた。
「なんでこんなこと…っ」
!?
わけがわからずあたりを見渡す。
巨大な花の上にいるようだ。
そして股間をこすりつけていた棒状のものは雌しべだろうか。

「…あ…」
雌しべの先端から発するピンク色の光を見た瞬間、一気に思考にもやがかかる。
「…お花に…栄養…あげなきゃ…」
パァァァ
＋催眠

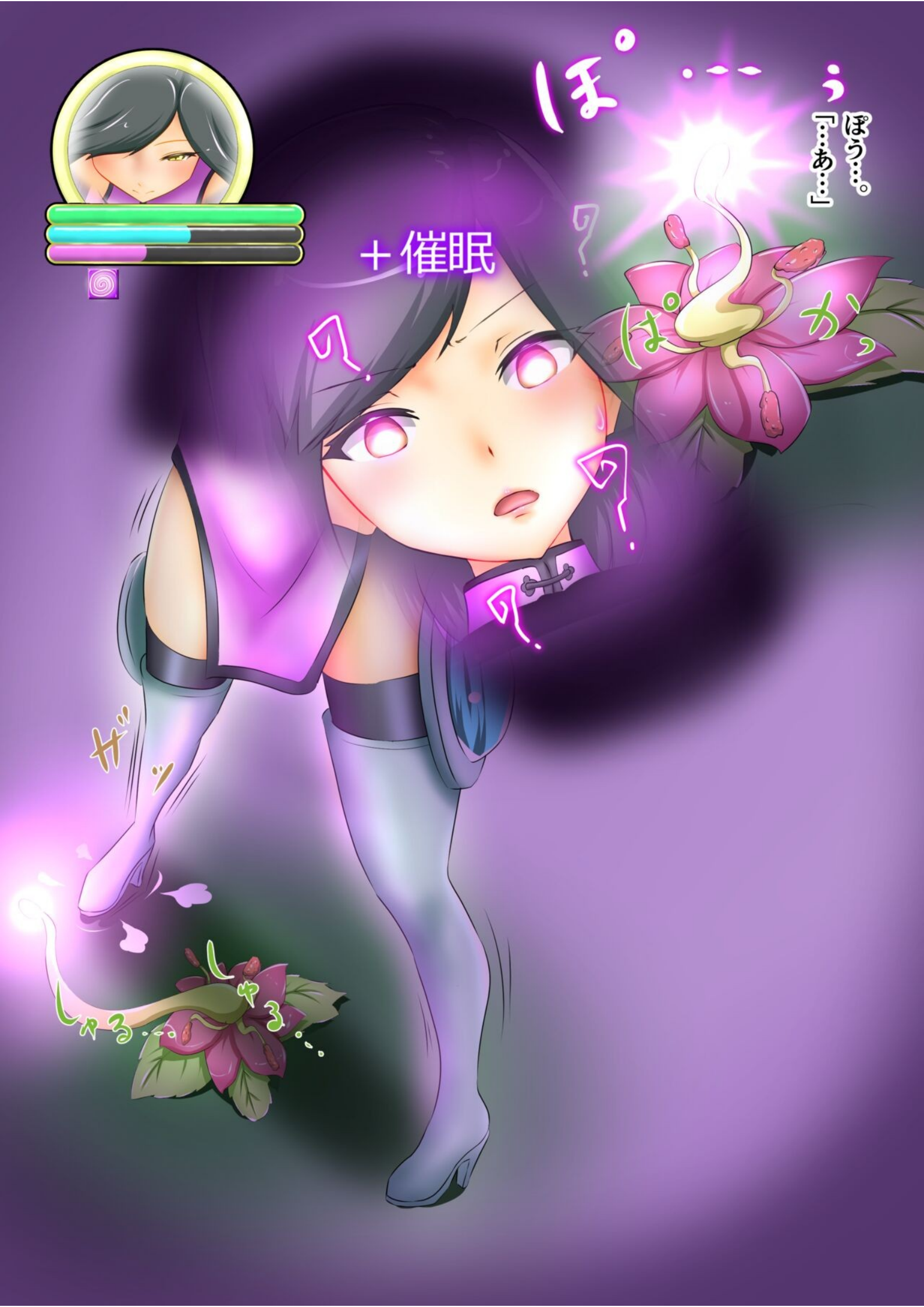
十色はうつろな表情で雌しべの付け根に股間をこすりつける。
「ん…あぁぁ♥ 気持ちいい…っ♥」
雌しべの表面はタオルのように柔らかく、少しざらついている。
十色はその感触に病みつきになり、夢中で腰を振る。
「…っ♥ も…イ…く…っ♥ 私の魔力…いっぱい受けとってぇ…♥」
ぬちゅ
ぬちゅ
ずりゅっ
ずりゅ

「あああああっ♥」
ビクッ
ビクッ
絶頂と共に魔力混じりの潮をふく。

十色は脱力感とともに我に返る。
（…あの光…見ちゃダメなんだ…！）
あのピンク色の光は催眠効果があるようだ。
「…見なければ…いいんでしょう…？」
幸い、積極的に攻撃してくるタイプではないようだ。
十色は目を閉じたまま呼吸を整える。

「はっ！」
十色は魔力でかたどった剣で雌しべを薙ぎ払う。
すると、花は一気に枯れ、霧散した。
「見ただけでアウトはズルいでしょ…」
十色は相手の理不尽さにため息をつく。

「…！」
地面に小さなつぼみをつけた植物がある。
先程の花とは大きさも形も違うが、色合いは同じだ。
おそらく同種。この大きさなら踏みつけるだけで倒せるだろう。
しゅる…
？？？？


ぽ・・・ぅ
ぽぅ…。
「…あ…」
＋催眠
ぱっ
ガッ
しゃる…
しゃる…

踏みつけようと持ち上げた足はつぼみを跨いでそのまま座り込む。
「くっ…体が勝手に…」

すとん

魔の者が未成熟なためか、今回は意識は保つことができている。
しかし体の自由が利かず、光から目を放すことができない。

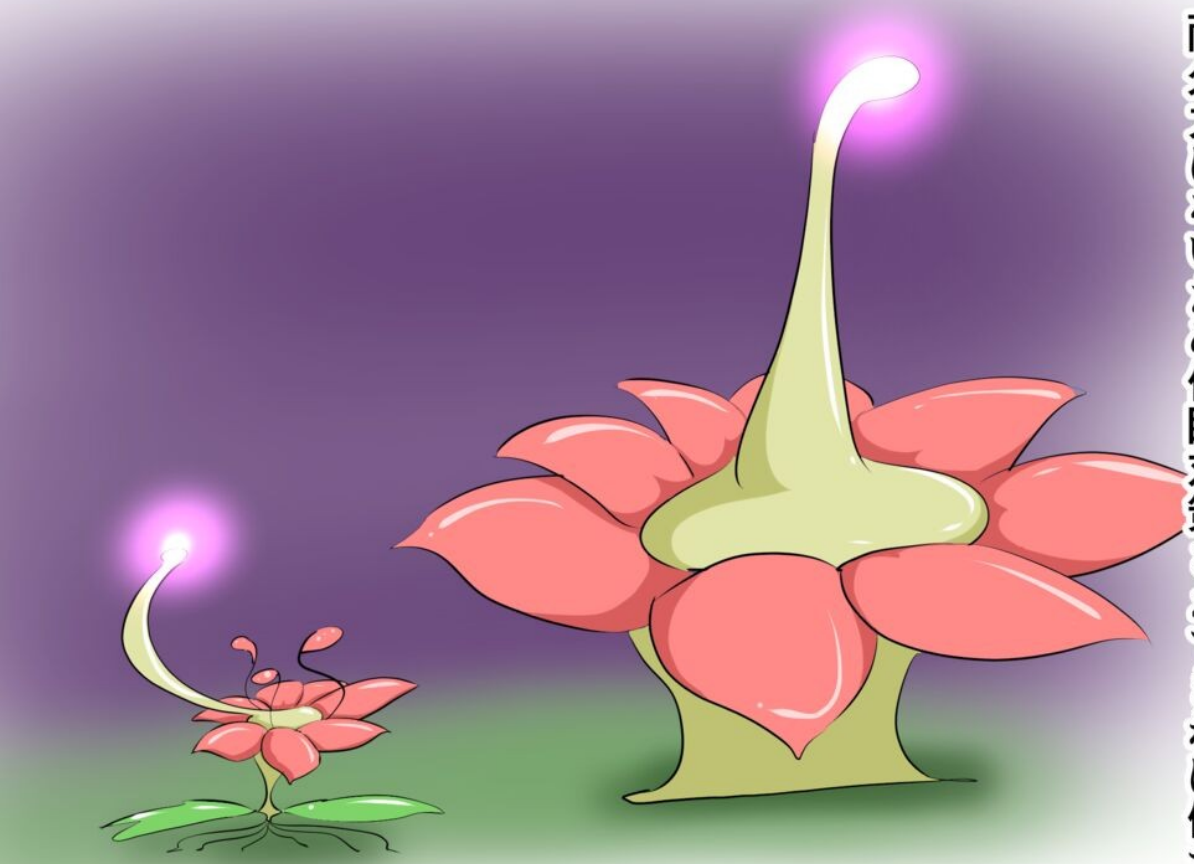
「この…っ 今度は何を……ひぁあっ♥」
不意に強い快感に襲われ悲鳴を上げる。
!!CRITICAL!!
きゅむ
ゾクン
!?
しゅるる…
くにゅ
ヒク
くにゅ
ヒクン
くにゅ
つぼみから伸びた小さな触手が十色のクリトリスをつまんだのだ。
「あっ♥ やめてっ あっあっ♥ やぁあああっ♥」
触手はそのままクリトリスをこねる。

十色は刺激から逃れようとするが体の自由が利かない。
十色の体は快感に震えつつも、触手がいじりやすいよう腰の高さを保っている。くぱっ♡
ビクッ
ふーっ、
ふーっ、
ガクッ
ガクッ
クチュッ♡
WEAK!
「く…うぅ…んっ♥ こんな…あっ♥ 弱…いっ♥ ヤッ…にぃ…♥」

「あぁあああああぁあっ♥」
十色は何もできずに絶頂させられてしまった。
（このまま一方的にやられたら…負け…ちゃう…）
ビクッ
ビクッ
ビクッ
プシャぁぁ
????

絶頂後脱力し、尻もちをつく十色。
ぷちっ
「…え？」
!!CRITICAL!!
????
ちっ
魔の者はその下敷きになり絶命した。
「……」
十色は何とも言えないもやもやした
気持ちのまま先に進むことにした。
ぐぇ…
ヌッ
ヌッ

レポート④「スランバー」



特殊な光を見せて獲物に催眠をかけ、自慰させて魔力を奪う花で、メス、オスの2種類ある。
メスは体が大きく、催眠能力が高い。
オスは体が小さく、催眠能力は比較的低い代わりに体を動かし獲物を責めることができる。
耐久力はないため催眠対策さえできれば倒すのは容易。

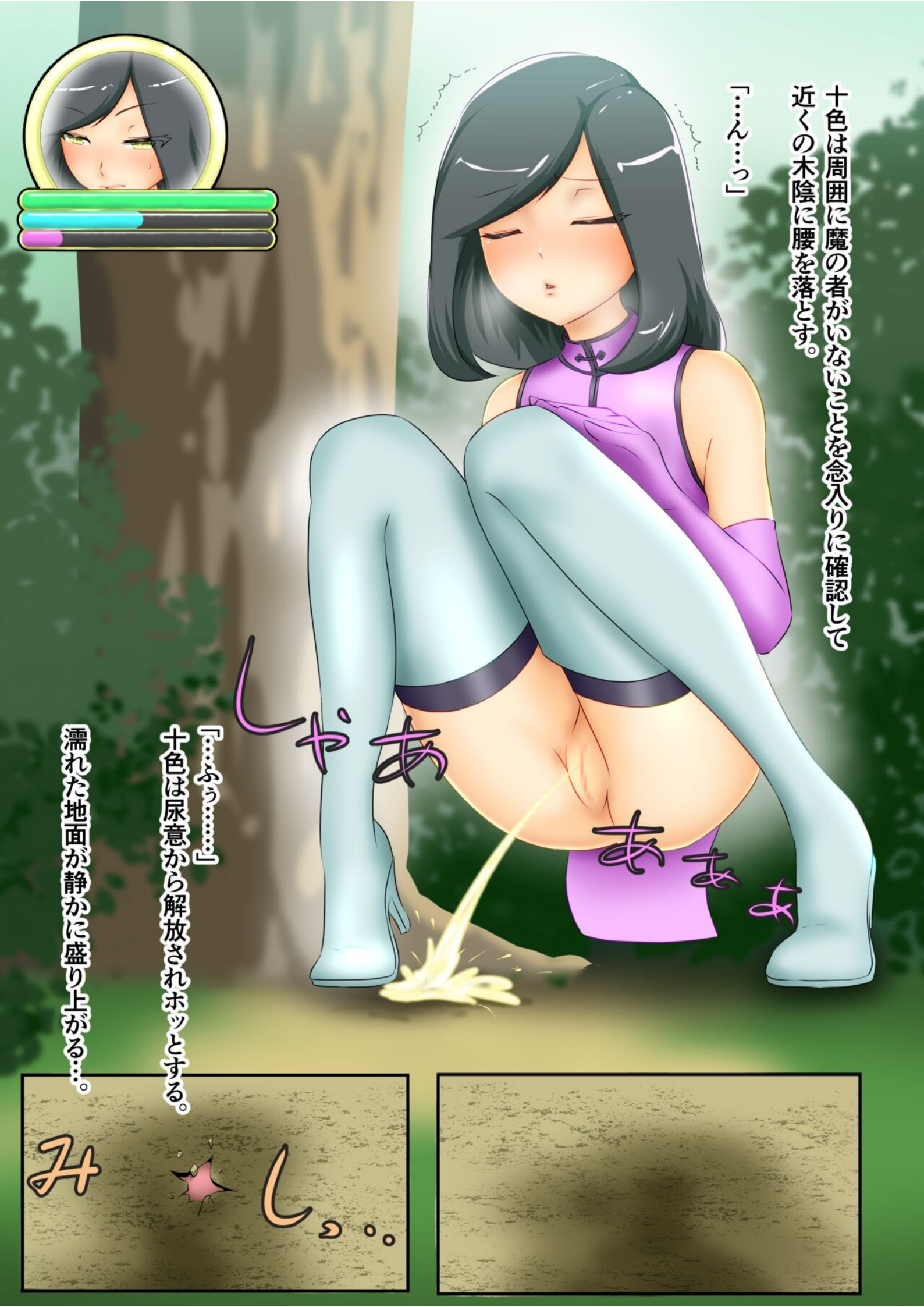
光を見ただけで催眠にかかるのはずるい。
催眠のせいとはいえ自分からあんなことしてたと思うと…恥ずかしい。

歩くこと数十分。
辺りの瘴気が薄まり、明るくなってきた。
もう少しで森を抜けられそうだ。
ここまで来れば強力な魔の者はいないだろう。

「……っ」
（……おしっこ…）

もじっ
もじっ

安堵と同時に強い尿意が押し寄せる。
町に戻るまで我慢できそうにない。


十色は周囲に魔の者がいないことを念入りに確認して
近くの木陰に腰を落とす。
「…ん…っ」
しゃあああ
「…ふぅ……」
十色は尿意から解放されホッとする。
濡れた地面が静かに盛り上がる…。
みしっ。。

「っ…んおっ!?」
十色は突然地面から飛び出した触手のようなものに貫かれる。
「ひぎっ…ぐっ…ぁっ♥」
さらにそれは十色の最奥に到達してもなお
勢いは止まらずぐいぐいと突き上げ、
十色を強制的に立ち上がらせる。

「んぐっ…なん…なの…あぁっ♥」
触手は膣内を容赦なく掻きまわし、
子宮口をゴリゴリと擦り上げる。
ゴリュ
ゴリュ
ゴリュ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
十色はあまりの快感に抵抗できない。

程なくして触手は十色の絶頂に合わせて大量の粘液を放出する。
「熱…っ…♥　この…出す…なっ　やあああああっ♥」
白濁液は膣内で吸収され魔力が満たされていく。
触手は粘液の放出が収まるとともに干からび、塵となって消えた。
「……」
魔の者がただで魔力を回復させるわけがない。
十色はこの後何が起こるのか予測できていた。
……手遅れだが。

「～～～～っ!?」
下腹部が灼ける様に熱く、痛いほど疼き始める。
覚悟はしていたが、想定以上の刺激に十色は悶絶する。
ずくん♥
ずくん♥
ずくん♥
「……ぅわっ！」
程なくして熱がおさまり、十色は自分の股間を見て驚く。
十色の股間には男性器のような触手が生えていた。
これは想定していなかった。
＋ふたなり化
＋鋭敏化

「…っ♥ ふー…っ♥ ふーっ♥」
十色は下半身を丸出しにしながら歩く。
恥ずかしいがそんなことは言っていられない。
股間に生えた触手は十色の感覚とリンクしており、
異常に敏感で少し布に擦れただけで腰が砕けそうになる。
こうしていても歩く振動やそよ風でもゾクゾクと快感が走り
魔力を垂れ流してしまう。
びく、
とろー…
びくん、

森の出口が見えてきた。
出口付近には魔導兵が数名いた。
おそらく十色の帰還が遅れているため、捜索に来たのだろう。
十色はとっさに木の陰に隠れる。
（…この状態で人前にっ!?）
まともに戦える状態ではない今の十色にとって魔導兵の助けはありがたい。
しかし同時に痴態を晒すことになるため、十色は躊躇する。

突然体をからめとられる。
「っ！？…しまっ…」
隠れていた木には植物型の魔の者『アイブゥ』がとりついていた。
ツタ状の体に派手な色をした実のような頭。
魔の者の中でも「雑草」呼ばわりされるほど弱い種だ。
考え事により周囲の警戒を怠ってしまっていた。
魔の者はおいしそうな獲物を前に
涎を滴らせる。
しゅるる
＋拘束
がばっ

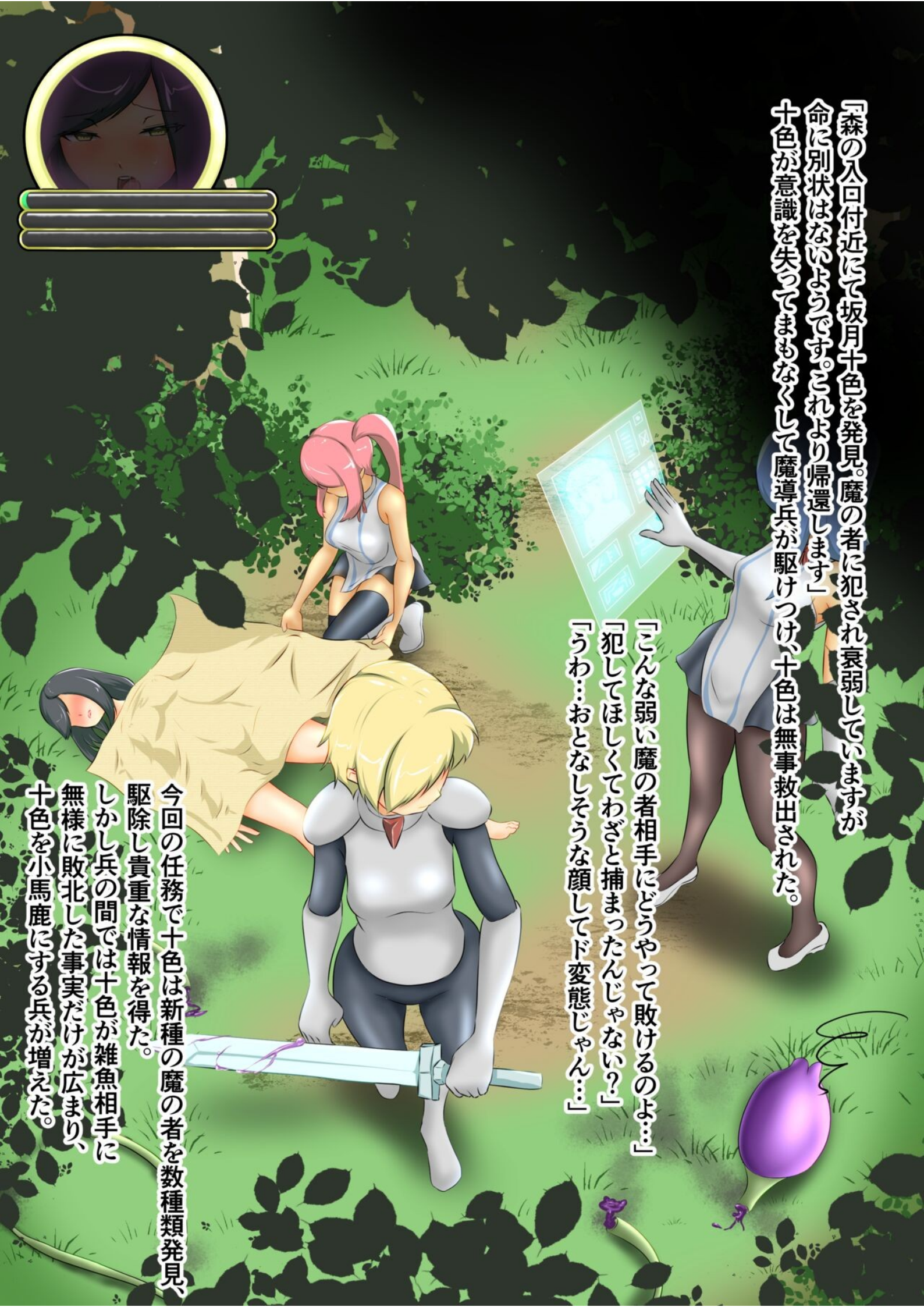
「くっ……ひぃんっ♥」
十色は抵抗しようとするが、
魔の者の口から滴る液体が触手に垂れた刺激だけで
全身の力が抜けてしまう。
ゾクッ
ゾクッ
十色の過剰な反応を見た魔の者は触手を前に大きく口を開ける。
魔の者の口内は粘液にまみれ、無数のヒダがうねっていた。
「…ま…待って…そこは…そこだけはぁ…っ」
とろぉ…
びくん
びくん
が
ぱ。

魔の者はペニスを丸ごと咥え込んだ。
口内のひだが触手に絡みつく。
「～～～～っ♥♥」
ぐりゅるるっ
ごきゅっ
ごきゅん
WEAK♥!!
CRITICAL!!!
十色は強すぎる快感になすすべなく絶頂。
射精させられてしまった。
（…まず…いっ♥　魔力…ごっそりもってかれる…っ♥）

十色が絶頂で悶絶しているのもお構いなしに
魔の者は激しくしごきあげる。
ぐっぽ。
!!CRITICAL!!
ガク
じゅぽ
じゅぷ
じゅぽ
WEAK
ぐっぽ。
ガクッ
「んぉ…ほっ♥ やえ…イッて…るって…♥ あぁあああっ♥」
十色は快感に屈してだらしなく喘ぐことしかできない。
脳が焼き切れそうな程の快感が体中の魔力を強制的に
下腹部へ集中させ、股間のから吐き出させる。

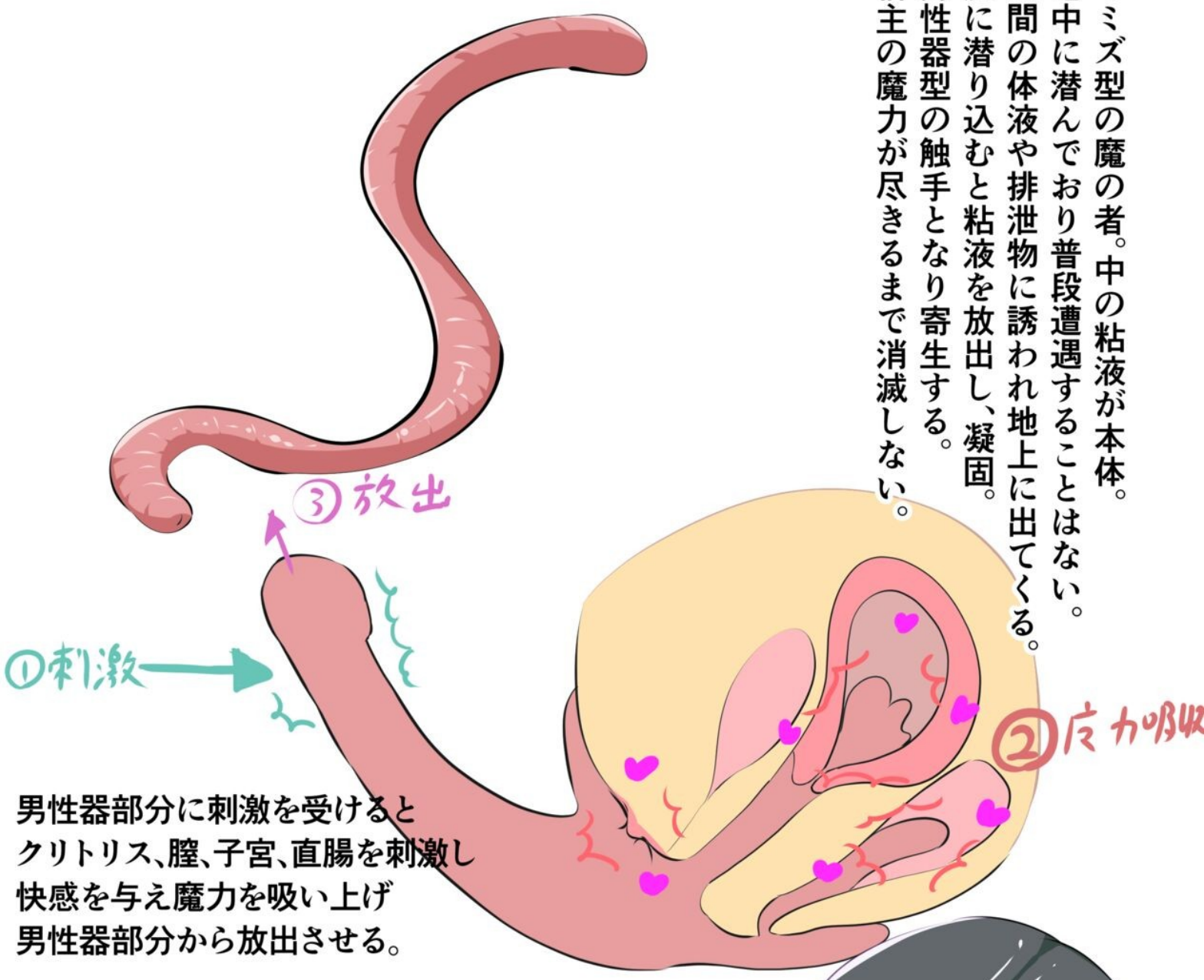
魔力が尽きて変身が強制的に解除されてしまった。
同時に股間に寄生していた触手も消失した。

魔の者の責めは止まらない。
今度は膣を舌で掻きまわし、魔力だけでなく精気も吸い上げていく。
「…っ♥ ～～っ♥ ……っ♥」
ガクガク
じゃぞぞぞ
ビクッ
ビクッ
CRITICAL!!!
じゅる
ぢゅぱっ
ぐっちょ
ぐっちょ
ぐっちょ
十色は責めに反応する力も残っていない。
好き放題精気を奪われていく。
意識が遠のいていく……。


「森の入口付近にて坂月十色を発見。魔の者に犯され衰弱していますが命に別状はないようです。これより帰還します」
十色が意識を失ってまもなくして魔導兵が駆けつけ、十色は無事救出された。
「こんな弱い魔の者相手にどうやって敗けるのよ…」
「犯してほしくてわざと捕まったんじゃない？」
「うわ…おとなしそうな顔してド変態じゃん…」
今回の任務で十色は新種の魔の者を数種類発見、駆除し貴重な情報を得た。
しかし兵の間では十色が雑魚相手に無様に敗北した事実だけが広まり、十色を小馬鹿にする兵が増えた。

レポート⑤「ペニサイト」

ミミズ型の魔の者。中の粘液が本体。
地中に潜んでおり普段遭遇することはない。
人間の体液や排泄物に誘われ地上に出てくる。
膣に潜り込むと粘液を放出し、凝固。
男性器型の触手となり寄生する。
宿主の魔力が尽きるまで消滅しない。



男性器部分に刺激を受けると
クリトリス、膣、子宮、直腸を刺激し
快感を与え魔力を吸い上げ
男性器部分から放出させる。

気持ち良すぎて身動き取れないし、
魔力が空になるまで解放されない。
とりつかれたら実質詰みね。

著者　でゅう
twitter　@yamade_yu